

# 國學院大學學術情報リポジトリ

青木敬著 『土木技術の古代史』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石橋, 宏, Ishibashi, Hiroshi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000446">https://doi.org/10.57529/0002000446</a>

なく描いた。その際に彼らの勝手な思い入れがもたらしたマ  
イナス面も描いているのだが、彼らの持つマジナル性や敗  
北者的側面によって、悲劇の主人公になってしまっているよ  
うな感じがする（誤読であれば御寛恕を乞う）。これは満蒙が  
「無人の荒野」であれば、また別なのだが、日本が条約上有し  
ていた満蒙権益を越境していこうとする動きや、それを誘発  
する満蒙の持つ引力（イメージ）というものが、満洲国に収  
斂していったのではなからうか。その点で、彼らの思いは、  
ある程度実現されていたのではなからうか。

（四六判、一八四頁、彩流社、二〇一六年五月刊、定価一八〇  
〇円＋税）

青木 敬著

## 『土木技術の古代史』

石 橋 宏

本書は古代の土木技術研究の第一人者として知られる著者  
が、主に古墳時代から奈良時代の土木技術についてまとめた

著作である。一般向けの著書のため、平易な表現を使用して  
いるが、古墳時代からの土木技術の推移とその技術がもため  
られた社会背景、土木技術の系譜を東アジアまで見渡して追  
求した高度な内容が取められている。厳密に区分できるもの  
ではないが、國學院大学在籍時に古墳の調査と観察を基に古  
墳築造技術の地域性に言及した学位申請論文『古墳築造の研  
究』（六一書房、二〇〇三年）を發展させた内容と、その後の  
奈良文化財研究所での終末期古墳、宮都や古代寺院の発掘調  
査、海外での調査経験を踏まえて公表した成果を通時的、体  
系的に整理したもので、本書は現段階での著者の到達点と捉  
えられる。

筆者が考える本書の特徴は、著者が古墳や古代寺院などの  
発掘調査において、土の特性を理解し、その土がどのようにに、  
どの場所に、どの順番で積まれるのか、版築に盛り込まれる  
小礫にまで気を配って技術体系を復元し、その類例を丹念に  
調べ、東アジアを視野に入れて技術系譜と社会背景に言及す  
る点にある。発掘調査で抱いた疑問がどのように解消され、  
それが土木技術史のなかでどのような意義を持つのか、その  
解き明かしてゆく過程は臨場感に溢れており、読者も一気に  
読み進めることができる。

本書は、以下の七つの章構成からなっている。

土木技術と古代史―ブローグ

列島を二分した技術

古墳時代前期

脆弱だった東西の融合

古墳時代中期

古墳の転換点

古墳時代後期

仏教寺院と土木技術

飛鳥時代

寺院・宮都建築の変容

奈良時代

土木技術からみた日本古代史—エピローグ

前半部の古墳時代は、古墳の築造技術に焦点を当てる。古墳の墳丘の構築手順やその構築技術の復元を通して、地域の有力者の連帯や、遠隔地とのネットワークはどのようなものか。さらに王権が技術者を管理し、各地の有力者とのような関係を結んでいたのか。最先端の技術を持つ渡来人を請来し、新しい土木技術がどのような特性を持ち、古墳築造にどのように導入され、墳丘に反映するのか。このような問題にヤマト王権側の視点と地域有力者側の視点、さらに新技術を携えてきた渡来人の故地である東アジアの視点をバランスよく組み込み、通時的に考察してゆく。

特に古墳時代前期の東日本と西日本の築造技術の地域性と、その背景の葬制まで踏み込んだ分析を核に、その後の後期の群集墳にまで及んだ古墳築造技術の変化が、地域有力者や有力農民層とヤマト王権との関係の変化を鋭敏に反映していることを示された点と、築堤などに用いられる新しい土木技術を導入した中期末以降の墳丘高大化は、東アジアの王陵

の動向とも関連し、墳丘の転換点であることを示した分析は、重要な意義がある。古墳がヤマト王権と地域有力者との関係を反映するとともに、東アジア的観点も重要なことは良く指摘されるのであるが、墳丘、横穴式石室、群集墳、渡来文物・技術など、個別に言及された視点が、古墳構築技術という視点から包括して言及されたことの意味は大きいと感じる。

後半部は古墳築造の時代が変化する飛鳥時代から奈良時代を対象としている。高松塚古墳やキトラ古墳、飛鳥寺や藤原京などの終末期古墳や宮都や寺院が造営され、各地にも官衙や寺院の建築が及んだ時代である。大陸から寺院築造技術とともに導入された、土を交互に積んで叩き締めて強度の高い地盤とする「版築」技術は、著者の海外での調査成果を基に東アジア的な分析がなされている。すなわち、版築発祥の地である中国の南朝と北朝の版築の様相と、それぞれ朝貢を結んだ韓半島の百濟・新羅への技術の伝達と確立、そして我が国に時期ごとの外交関係を反映したルートから寺院築造技術が伝播したことを、まさに版築技術の分析から解き明かし、当時の東アジア情勢にも言及する。寺院建立という国家規模のプロジェクトに、国家間で協業する様相を考察し、また、国内の各地の寺院にどの国の系譜を引く技術が使用されているのか分析が可能であること明らかにしてゆく。まさに技術

史だけではなく、東アジアの外交史であり、版築から東アジアを見通した成果は、寺院の瓦や伽藍配置の研究とも合わせて、寺院建立の総合的研究が進むことが予想され、その意義は大きい。

さらにこのような寺院に使用された版築技術が、藤原宮にどのように採用されたのか、地盤改良技術の「掘込地業」と建物の格式に着目した分析は、完成後目に見えない部分まで細部にこだわった土木技術投入の様相を明らかにし、藤原宮の官衙の掘立柱建物の分析では、掘立柱建物の穴を掘削した役夫の癖を読み取り、建物造営に関わる役夫の編成体制の復元にまで話が及ぶ。このような技術者集団の編成については、文献史の研究成果を中心に、考古学では埴輪の工具痕跡の分析や瓦の刻印など、特定の遺物研究で行われてきた。このような問題に遺構研究が肉薄できる可能性を鮮やかに示すのである。

そして共に国宝である東大寺法華堂と薬師寺東塔の修理事業に伴う基壇の調査では、使用される土木技術と建物の性格が密接に関連し、合理性だけでは導き出せない信仰に根差した建築の過程が復元されていく。その他にも築堤や官道などさまざまな事例から、使用される技術とその管理体制や技術伝習の在り方が展望されるが、技術の分析だけに留まらない、古代社会の歴史像の復元にまで及んでいる。

本書の魅力は、著者が遺跡で向き合った土木技術の解明の過程と、その技術から明らかにされた土木技術者の活動と古代社会であることは言うまでもないが、その土木技術体系を普遍化するにあたり、過去に調査された多くの遺跡の遺構情報とを再検証しており、遺構研究の可能性と豊かさにも気づかせてくれる点にもあると考える。本書で示された視点は、さらに多くの遺構研究に繋がるものと考えられ、ぜひ多くの方に直接手に取って確かめてほしい。筆者の力量では、本書の魅力や躍動感あふれる成果、今後の遺構研究の可能性を到底伝えることができないからである。

（四六判、二七八頁、歴史文化ライブラリー四五三、吉川弘文館、二〇一七年十月、定価一八〇〇円＋税）